

特集に当って

東京大学 伊理 正夫

ORの対象は、究極的には、人間社会のことであり、人間は所詮地球表面に付着して生きているのだから、ORにとって、地表面の幾何学的性質の拘束を受ける構造的な情報をまともに取り扱う技法およびそれを支える方法論が重要であるのは当然である。つまり、地理的な情報を重視して各種の現実の社会の問題をOR的に解析し、制御するという態度は、ORにおいて本質的である——少なくとも原理的には。しかし、抽象的な多次元空間の幾何学がORで古くからよく用いられているのに対して、最も具体的かつ特殊で簡単な(はずの)2次元の初等幾何としての地図情報・地理情報の構造が最近までそれほど体系的に扱われていなかったのは何故であろうか。一般的・抽象的なもののほうが特殊で具体的なものより扱いやすいということは確かである。別の言い方をすると、前者では“扱えるものだけ扱っていけば事足りる”のに、後者では“現実から逃避できない”のである。

本特集の諸論文からも見られるように、一見単純そうな2次元の問題が意外と困難な問題を多くかかえている——特に、実用的な規模の問題を扱おうとすると、他の多くのORの手法がそうであったように、地理情報をまともに取り扱うにはどうしても計算機の助けを借りなければならない。計算機のハードウェア(本体も周辺機器も)のめざましい進歩(能力

の増大と価格の低下)とソフトウェア技術の一般的水準の向上は私自身がこのような分野に関心をもちはじめた10年前とはまったく異なる技術的環境を現在作り出しているようである。最初にも述べたように、潜在需要は無限にあるので、最近急激にこの方面への関心が各所で高まりはじめ、有効な実用例が数多く現われているようである。

わが国は古くから世界に冠たる整備された地図を有しているが、10年ほど前から国家的な見地から国土情報、地域情報、都市情報等の整備にも力を入れはじめ、また、その基礎となる方法論的研究もこつこつと行なってきた。OR関係者がそれに果してきた役割も小さくない。地理情報のもととなるデータの作成・整備には——計算機を使用するにしてもなお——多大の労力と費用を要することもよく知られているとおりである。無駄な投資を減らしお互いに有効利用ができるように、各種の地理情報システムを今後作ってゆくためには、現在ただ今われわれにとって最も大切な時期であると思う。

このようにいろいろな意味で、今回この特集が企画されたことは正に時宜を得たものであろう。この特集を契機としてOR学会会員のあいだに地理情報に対する関心のいっそうの高まりが興ることが期待される。